

## 第4章 その他

### 1 現場視察

#### (1) 人と防災未来センター

##### ① 施設の概要

阪神・淡路大震災から得た貴重な教訓を世界共有の財産として後世に継承し、国内外の地震災害による被害軽減に貢献すること、および生命の尊さ、共生の大切さを世界に発信する事を目的に設立された。



人と防災未来センター

センターには調査研究機関が置かれ、研究プロジェクトを立ち上げている。大規模災害発生時に災害対策を統括する機関に適切な情報提供が行われており、被災地の被害軽減と復旧・復興に貢献するため、震災などの大規模災害および防災に関する資料の収集・蓄積・体系化・データベース化を継続して行うと同時に、災害対策にかかわるエキスパートの育成が行われている。また、アジア防災センターなどの国際研究機関を集約することにより、国際的な防災・人道支援の拠点形成を図っている。

##### ② 博物館

博物館施設としては、2002年4月に開館した『防災未来館』と2003年4月に開館した『ひと未来館』を有している。防災未来館には、地震破壊のすさまじさを迫力ある大型映像と音響で体感する『1.17 シアター』や地震直後の



震災の記憶を残すコーナー

まち並みをジオラマ模型でリアルに再現した『地震直後のまち』、震災関係資料を提供者の体験談とともに展示する『震災の記憶を残すコーナー』や地震直後や復興過程の生活・まちの姿をメッセージとグラフィックスで解説する『震災から

復興をたどるコーナー』、ビデオで震災体験を紹介するとともに語り部が自らの体験を語る『震災を語り継ぐコーナー』などが展示されている。また、ひと未来館では、東日本大震災被災地のドキュメンタリー映像や風水害の実写映像などが上映されている。阪神・淡路大震災で起こった出来事を、次の世代の子ども達に伝えるだけでなく、災害に対する準備に役立つ知恵や情報などを発信する施設となっている。

## (2) 北淡震災記念公園

### ① 記念公園の概要

1995年1月17日午前5時46分に発生した阪神・淡路大震災は、マグニチュード7.3、最大震度7を記録し、6,434人の犠牲者を出した。

この地震は、六甲山から淡路島に至る「六甲淡路断層帯」の一部が活動したため起こったものであり、野島断層は、震源から最も近い断層であったことから、断層面が地表に約10kmにわたって露出した。

特に露出状況が顕著であった地域を持つ旧北淡町は、その貴重性から、早い段階から現場を保存するため取り組み、実地研究を行ってきた。

その後、現場は北淡震災記念公園として整備され、1998年4月に野島断層保存館として開館、道路や畑の畦、生垣のズレなど、さまざまな地形の変化をそのまま保存・展示している。なお、野島断層は同年7月に国の天然記念物に指定されている。



断層のずれがそのまま保存される

### ② メモリアルハウス

野島断層の真横に位置していたにもかかわらず、震災時、ほとんど壊れなかった民家を兵庫県が買い取り「メモリアルハウス」として公開している。

室内は、地震発生直後の家具や食器などが散乱した様子を再現しているほか、家族の証言をもとに、和室の天井面や柱に水平方向、垂直方向とのズレを示す表

示をラインで示し、家が大きな揺れによって傾き、歪んでいることが実感できるよう施している。

さらに、敷地内にはしる断層により、土地が段丘状になっていることを確認でき、震動の大きさを体感できる。

このほか、毎週火曜日、震災の記憶を風化させないためにも、被災者による「震災の語り部」事業が行われている。自らの生の体験をありのままに語ることで、地震に対する備えの大切さ、命の大切さを訪れた人々に語り継いでいる。



被災した直後の部屋の様子を再現

## 2 茅ヶ崎市における図上訓練

第3章の「特色ある訓練」の部分において、今回視察を行った西宮市、神戸市、淡路市の3市の特色ある訓練や研修などを紹介したが、ここでは、神奈川県内の特色ある訓練として、当調査研究メンバーの一人が所属する茅ヶ崎市の図上訓練について紹介する。

茅ヶ崎市は、2011年の東日本大震災を契機に災害などが発生した場合には、縦割りの各部局の配置を崩し、即時に横断的な組織を編成して、災害に即応できるように工夫を凝らした新しい防災体制を発足させた。

その体制で、年に1回「災害対策本部運営訓練」と、それに並行して「図上訓練」を実施して、地域防災計画に書かれている内容が本当に正しいのか、また応急対策活動にかかわる計画やマニュアルが機能するのか、さらに新たに直面する課題に対応できるのかを検証している。

2014年11月18日に実施した訓練で4回目を迎え、最初の1～2回は本当に手探りの状態であったものが、3回目で何とか訓練らしい形になってきたものであり、今後はさらなる完成度を目指している。

訓練では、マグニチュード7.9（震度6強）の相模トラフを震源とする地震が発生した場合を想定し、茅ヶ崎市内において地震発生から3～4時間経過した場



災害対策本部運営訓練の様子



図上訓練の様子

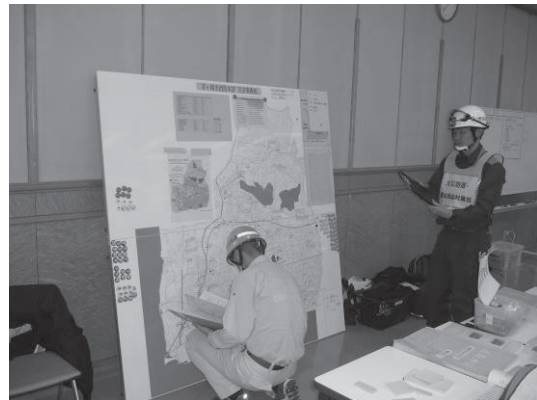
面からスタートする。

まず、災害対策本部運営訓練が開かれ、被害の状況報告があり、それに対して、各部局から職員の参集状況や避難所の運営状況、津波の情報や燃料などの備蓄の状況などが報告され、その内容について、具体的な対策を検討していくという流れで訓練が進められた。



そこで、災害対策本部から、今後の重点課題などが次のように示された。

- ・ 火災の対応
- ・ 緊急医療の的確な配置
- ・ 的確な広域応援の要請  
(優先順位を付けて取り組む)
- ・ 今後の避難者増の対応
- ・ 救援物資の的確な配給



図上訓練の様子

別の会場において実施している図上訓練参加の各班員が、モニターに映し出される災害対策運営訓練の様子をリアルタイムに見ることができ、迅速に対応できていた。



中間報告の様子

図上訓練における中間報告では、各班の責任者を集め、初期情報の時から今までの間で状況がどう変化したかの報告があった。また、報告の仕方について、ただ現状をありのままに説明する状況報告だけではなく、具体的問題点までを含めた報告が必要との指導がされていた。

時間の経過とともに被害状況や関係機関の活動状況が付与され、刻々と変化する状況に各班員は、情報を集約・分析し対策方針を検討するとともに、的確な指示を出していた。また、市役所職員と消防職員の連携も円滑に行われており、お互いの特質を活かしたものであった。

最後に訓練参加者が集結して、各班の代表者などから所見発表があり、評価・検証班の責任者から訓練の講評があった。

防災の体制を作り訓練を始めてからわずか4年で、ここまで精度の高い図上訓練に仕上げたことは凄い成果だと言える。



所見発表の様子

